

高岡町埋蔵文化財調査報告書第33集

むか
穆 佐 城 跡

穆佐城跡保存整備に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書(Ⅰ)

高岡町教育委員会

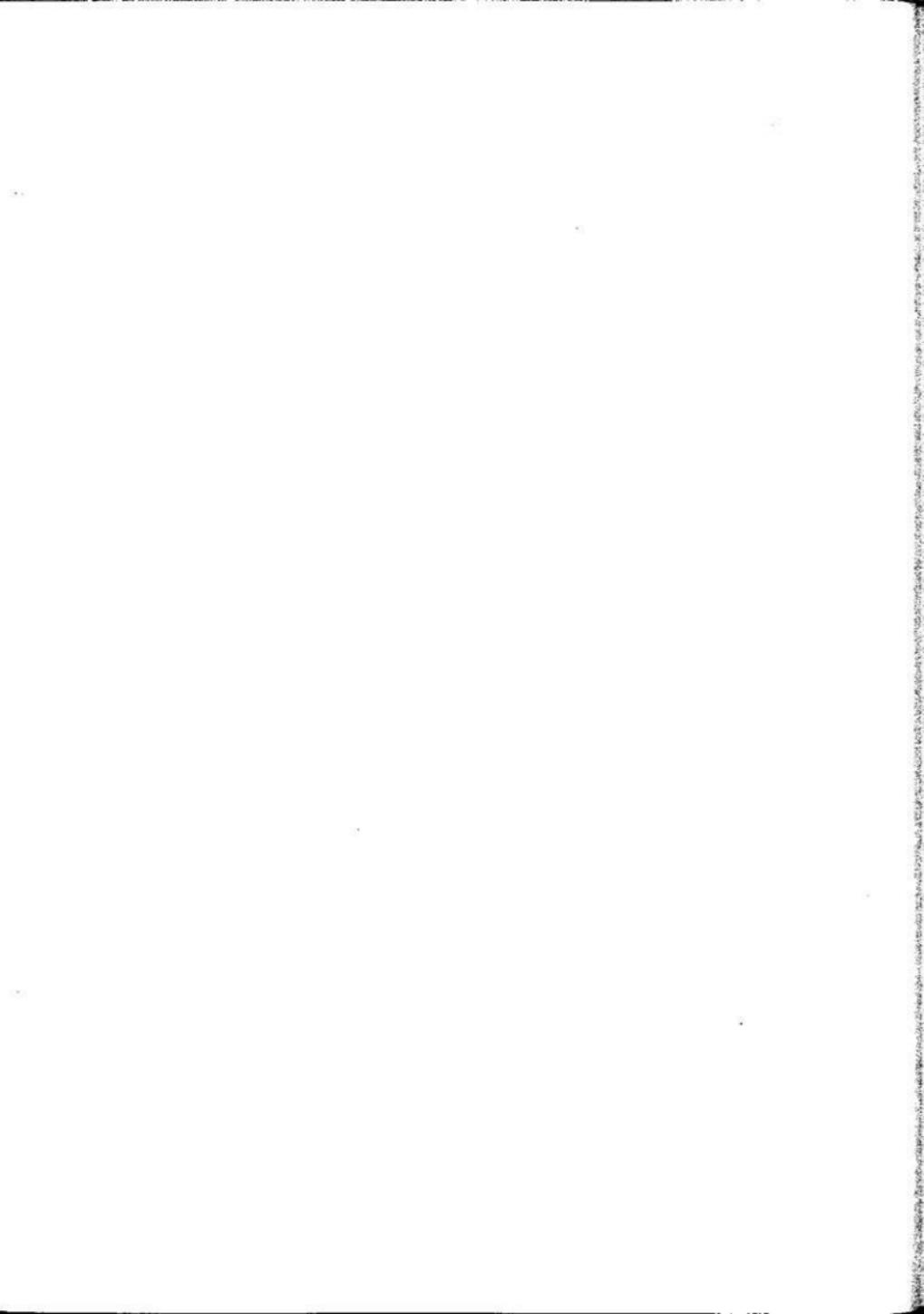
2004. 3. 31

むか
穆 佐 城 跡

穆佐城跡保存整備に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書(Ⅰ)

高岡町教育委員会

2004. 3. 31



序 文

穆佐城跡は、南北朝時代から約280年近い歴史を持つ山城で、南九州の中世史を語る上で重要な位置をしめております。特に、南北朝時代には北朝方の九州の拠点的存在となり、幾たびとなく戦場の舞台になったところでもあります。

高岡町は平成8年度に「穆佐城跡保存整備基本計画」を策定し、穆佐城の歴史的な公園整備を進めてきているところであります。そのような中、平成14年3月には国史跡としての指定を受け、今年度からは「穆佐城跡保存整備事業」として、保存整備計画の見直しを行い、合わせて発掘調査を実施しております。

今年度の調査では、穆佐城内西側の曲輪で通路状の遺構が検出されております。今後このような発掘調査を継続的に行い、穆佐城の歴史を解明することによって、文化遺産としての価値がさらに高められることと信じております。

そして、本書が、これからの中世史研究の一助となり、今後の穆佐城跡保存整備事業の推進に寄与することを期待しております。

最後に、発掘調査にあたりご助成を賜りました文化庁、宮崎県教育委員会、さらには専門的指導を頂いた先生方など関係者の皆様に心より厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

高岡町教育長 中山芳教

例　　言

1. 本書は、平成15年度に実施した国指定史跡穆佐城跡の保存整備事業に伴う発掘調査の概要報告である。
2. 発掘調査は、文化庁ならびに宮崎県教育委員会の補助を受けて高岡町教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆・編集は、1章第3節2の執筆を今城正広、その他の執筆と編集を島田正浩が担当した。
4. 整理作業は、[REDACTED] の協力のもと、島田が担当した。製図は廣田晶子による。
5. 遺構実測は、平面直角座標（測地成果2000）を使用している。
6. 穆佐城跡の遺跡番号は311で、遺物は高岡町教育委員会で保管している。

目　　次

I はじめ	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査体制	5
第3節 穆佐城跡の概要	6
II 調　　査	11
第1節 曲輪23の調査	11

挿図目次

第1図 穆佐城周辺遺跡分布図	6
第2図 穆佐城跡縄張図	8
第3図 穆佐城跡地形図	10
第4図 曲輪23（7次調査）調査位置図	11
第5図 曲輪23-1調査区全体図	12
第6図 曲輪23-2・3調査区全体図および 通路状遺構土層図	13

写真図版

図版1 穆佐城跡全景（南西から宮崎平野を望む）穆佐城跡全景（南から）	15
図版2 調査区全景（空撮）、調査区23-1全景（空撮）、2号上坑（南から）	16
図版3 通路状遺構（北から）、通路状遺構北側（南西から）、曲輪23と曲輪24（西から）	17

表目次

表1 穆佐城跡調査結果	9
表2 報告書登録抄	18

I はじめに

第1節 調査に至る経緯

移佐城は宮崎の中世を代表する日向三高城のひとつとして広く知られていたが、移佐城自体の解明はほとんど行われていなかった。その契機となったのが、平成2・3年度に実施された埋蔵文化財詳細分布調査である。その中で、移佐城の範囲を明確にする必要があったため、千田嘉博氏（現国立歴史民俗博物館助教授）を招聘し縄張図を作成した。その後、平成10年までに6回にわたり確認調査が行われた。

ちょうど同じ時期に移佐地区活性化のひとつとして、移佐城跡を利用した活性化策が検討され始めた。高岡町では役場の北側に「天ヶ城跡」という中世城館があり、ここに公園整備が終了したところであった。ただ、ここは昭和40年代からの公園開発により造構はことごとく破壊され、平成の大守閣まで建てられている状況である。そのため、移佐城跡においては文化財指定を行い、文化財としての保存と活用を前提とした整備を推進していくこととなった。

高岡町は、地元住民や地権者等の協力もあり、平成10年4月に町史跡に指定した。さらに平成13年7月には「移佐城跡」の国史跡の申請を行い、平成14年3月19日に国指定史跡に指定された。それを受け、平成14年度には移佐城の一部について土地の公有化を行い、今年度から継続的に保存整備を実施することとなった。今年度は平成8年度に作成された「移佐城跡保存整備基本計画書」を見直し、内容を補足する目的で検討委員会を招集し、並行して発掘調査を行った。

発掘調査は、過去の発掘調査が城域の東側半分に限られていたため、まず、城館全体の大まかな時期的変遷を把握するための調査を行い、その結果を受けて、整備の中心となる地区を対象に調査を進めることになった。

第2節 調査体制

発掘調査の体制および保存整備検討委員会は次のとおりである。

主 体	高岡町教育委員会
事務局	中山芳教（教育長）
検討委員	谷口義信（宮崎大学農学部教授・砂防学） 包清博之（九州大学芸術工学部助教授・緑化デザイン） 山田 涉（宮崎大学教育学部講師・中世史） 千田嘉博（国立歴史民俗博物館考古研究部助教授・城館および考古学）
指導・監督	本中 真（文化庁文化財保護部記念物課主任文化財調査官） 和田理啓（宮崎県教育厅文化課埋蔵文化財係主任主事） 佐藤 治（宮崎県教育厅文化課文化財係主査）
事務担当	小岩崎正（社会教育課長） 上地由紀子（社会教育課社会教育係副主幹・庶務） 今城正広（社会教育課文化財係主事・学芸員） 廣田晶子（社会教育課文化財係主事・学芸員）
調査担当	島田正浩（社会教育課文化財係長・学芸員）

第3節 穂佐城跡の概要

1 穂佐城周辺の歴史

70%以上を山林が占める高岡町は、東部に宮崎平野を望み西部には標高170m以上の台地が広がる。

高岡町の遺跡は、現在知られているだけで140箇所あり、それらのほとんどは、町中央を東流する大淀川やその支流（内山川・浦之名川など）により形成された河岸段丘上に位置している。

高岡町の歴史は旧石器時代まで遡り、高野原遺跡、水迫第2遺跡でAT下位の調査が実施されている。

縄文時代の遺跡は、特に早期と後期の遺跡が多く、橋山第1遺跡や久木野遺跡など11遺跡で発掘調査が実施され、集石遺構や陥し穴状遺構が検出されている。

弥生時代では、丹後堀遺跡や学頭遺跡があり、学頭遺跡では後期の溝状遺構が検出されている。

古墳時代では、久木野地下式横穴墓地群で3基の調査が行われ鉄斧と玉類が出土し6世紀前半とされている。また、八児遺跡では、7世紀代のカマドをもった住居跡が検出されている。

古代は、高岡周辺は「穆佐郷」と言っていた。古代では、蕨野遺跡など4遺跡で調査が行われ、その蕨野遺跡では、9C後半の土師器生産に伴う焼成土坑（窯）が検出されている。

中世では、小規模な山城が点在したと考えられ、現在10箇所以上（文献等では18箇所）を確認している。また、穆佐城跡の西側の低地上に所在する梅木田遺跡からは、15世紀後半以前の護岸施設をもつた水路が検出され、出土した杭から当時の植生環境を復元する試みがなされている。

この時期までの中心地が穆佐城跡周辺だったのに対して、近世になると天ヶ城跡周辺に移る。薩摩藩は、天ヶ城（高岡郷）と穆佐城（穆佐郷）の裾地に多くの郷士を居住させ、綾、倉岡とともに閑外四ヶ郷として東側の防御の要とした。高岡麓遺跡では、計画的な街路設計がなされ郷土屋敷群と町屋群に分割されている。1地点の町屋の調査では井戸や土坑等を検出した。8地点は武家門跡や土坑が確認されている。



第1図 穂佐城周辺遺跡分布図

2 穂佐城の歴史

穂佐院

中世の穂佐は、島津荘の寄郡である穂佐院として位置づけられる。穂佐院は、現在の高岡町の全城及び宮崎市西部（倉岡・富吉付近）にかけての地域に比定される。建久8年（1197）の日向国田帳には、諸県郡に「穂佐院300町」とあり、地頭として島津忠久の名前が見える。

南北朝時代

穂佐城がはじめて文献史料にあらわれるのは南北朝期である。建武2年（1335）12月24日、「足利殿御領」である穂佐院に新田方の伊東祐広らが押し寄せ、穂佐院政所に立て籠もった。これに対し、同晦日、穂佐城を足利方であった土持宣栄一族が攻略、土持一族はそのまま穂佐城に拠った。翌年1月10・11日には、新田方である肝付勢が攻め寄せたが、土持氏らはこれを撃退した（建武3年2月7日「土持宣栄軍忠状」旧記雜錄）。

建武4年4月14日、北朝方の畠山直顯が穂佐城に入城した（日向記）。畠山直顯は足利氏一門で、尊氏によって「國大將」として派遣され、興国6年（1345）9月には、日向国守護職に任命されている。

中央において足利尊氏と直義・直冬の間で不和が起こると（觀応の擾乱）、日向国においても抗争が表面化した。すでに日向・大隅に勢力を広げていた畠山直顯は、直義・直冬につき、穂佐城に城郭を構えていた（觀応3年「足利義詮軍勢催促状」旧記雜錄）。正平12年（1357）、直顯は、志布志松尾城に據る新納実久を攻めたが、鹿児島から米援した島津氏久に敗れ穂佐城に退くと、ついには南朝方の菊池武光に穂佐城を攻められ没落していった（太平記、「牛屎氏覺書」旧記雜錄）。

正平22年12月、足利氏は今川了俊を九州探題に任命している。一説には了俊が穂佐城に入ったとされ、日向国の国人層の支持を失った了俊は、応永3年（1396）、穂佐城から引き上げていった（日向記）。この間、了俊は、奈良興福寺一乘院がもっていた穂佐院領家職を半濟に指定し、兵糧料所として樺山資久に預けている（応永6年「今川了俊預置状」樺山文書）。また、明徳2年（1391）には、穂佐院領家職は相国寺に転じていたが、半濟を理由に三俣院高木氏の押妨を受けていた。これに対して、相国寺側は島津元久に対して穂佐院の保全を求めていた（樺山文書、島津家文書）。この頃より、穂佐院に対して島津氏や一門の樺山氏が次第に関係していくと考えられる。

室町時代

応永10年（1403）には穂佐城を含む川南の地（大淀川以南）は、島津元久の手に属していた。元久は、はじめ穂佐院など諸所の守りとして叔父である伊集院久俊を派遣していたが、2・3年後に久俊が辞任、替わって元久の実弟である島津久豊に命じた（「想翁公御譲中」旧記雜錄）。

応永18年（1411）8月、兄元久が没すると、久豊は島津家第8代として相続し、伊集院氏など、久豊に叛乱する薩摩・大隅の諸族を平定するために力をそいだ。しかし、翌年、伊東氏が川南に侵攻、この時、穂佐城は西の城が陥落し、破れた島津方は末吉まで退いた（「久豊公御譲中」旧記雜錄）。

応永31年（1424）、久豊は再び日向国に進出、加江田城を攻め落としたが、翌32年に没した（「義天公御譲中」旧記雜錄）。その子忠国も、久豊の日向国進出の遺志をつぎ、穂佐城など川南の地に進出した。一時、穂佐城は忠国の支配下にあったが、文安2年（1445）9月、穂佐城は、土持氏とともに侵攻した伊東祐庵によって陥落した（日向記）。これ以後約130年間、穂佐城は伊東氏の支配となった。

鎌倉・江戸時代

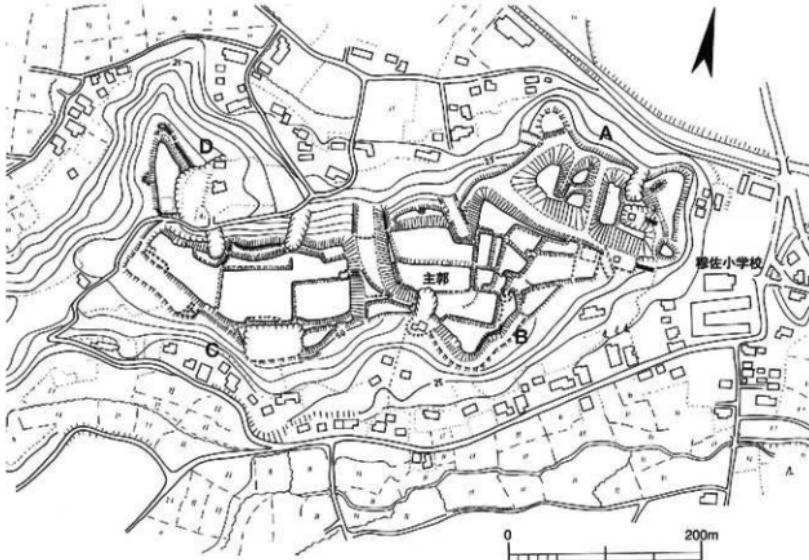
天正5年（1577）、伊東氏が豊後国に退去すると、穆佐城は再び島津氏の支配下となった。「樺山絶劍自記」によれば、翌天正6年、美々津合戦の後、樺山氏が穆佐高城を拝領、兵部太輔忠助の子規久が一族を率いて穆佐城に入った。また、同17年（1589）11月には、規久が地頭に命じられ、地頭知行分として「小山田拾六町」を拝領した。

慶長5年（1600）、伊東氏家臣稻津揚部が島津氏に対して蜂起すると、穆佐城など諸県の各城はその攻撃の対象となった。この時の穆佐地頭は川田大膳亮国鏡であった。宮崎城を陥落させた後、10月4日、稻津勢は穆佐口に侵攻、上キサ越（木佐越）にて2度にわたって穆佐勢と合戦に及んだ。同月10日、島津方の平田太郎左衛門尉が穆佐勢を率いて打って出ると、細江より稻津方である田野衆が応戦、的野の花立越にて合戦に及んだ。11月20日、稻津因幡守らは軍勢を半い、細江表に出張し、穆佐城まで攻め寄せ、惣城戸の一重をうち破っている（日向記）。

「上井覚兼日記」によって、当時、覚兼の居城である宮崎城には、「城内衆」と呼ばれる城に居住する家臣たちがいたことが知られている。穆佐城についても同様で、後に書かれた「近郷穆佐倉岡綾高城山之口勝岡野尻須木由緒」（横山家文書、天ヶ城歴史民俗資料館蔵）によれば、川田国鏡が地頭の時、穆佐城内に屋敷を構えていた衆が吉利休兵衛以下23名いたと記されている。それが、「天下静謐」「諸国下城」となると、穆佐城廻りに屋敷を構えるようになった。この「下城」の時期については元和の一国一城令を契機とする考え方も多いが、同じ山城である天ヶ城については慶長7年（1602）とあり（「高岡由緒」中原家文書）、穆佐城についてもこの頃に家臣が籠に下りたとも考えられる。

3 穆佐城の地形と特徴

穆佐城の周辺地形は、東に大淀川を臨み西から南にかけては田野から延びる山々が迫っている。この周



第2図 穆佐城跡縄張図

辺の丘陵は、宮崎層群の上にシラスが堆積して形成される。

移佐城は、移佐小学校の西隣の標高60mからなる丘陵にあり、その丘陵を大規模な堀切により4つに区画される。東端の地区（A地区）は小規模な曲輪と堀切から構成される。その西隣の地区（B地区）は主郭が存在するところで、移佐城の中心的曲輪群と考えられる。1mから5mの段差をもって曲輪が区画され、主郭とする曲輪7は堀切に対して大規模な土壘が巡らされている。また、曲輪は坪之城と言われ10代当主島津忠国誕生の地と伝えられる。さらにその西隣の地区（C地区）は、B地区と同様に曲輪が段差をもって区画される。また、個々の曲輪面積が移佐城の中で最も広いことを特徴とする。C地区的北隣の地区（D地区）は一つの曲輪に横堀を巡らしている。

南九州の城郭は大規模な堀切と広い曲輪で構成されることを形状から見た特徴としている。移佐城の場合、それぞれの曲輪群をひとつの大規模な曲輪と見ることでその特徴を有していると言えよう。

4 今までの調査

平成2年度に移佐城跡の縄張図を作成し、その成果を基に発掘調査を実施している。地権者や立木等の関係から調査地や調査方法は自ずと制限され、城域の東側半分の範囲を、しかも立木の間を1m×2m～10m規模の小さなトレンチによる調査を実施している。発掘調査は通算で6回（1～6次調査）実施し、表1にまとめた。

1次調査では明確な遺構は無く、時期は定かでないが盛土造成により平坦部を作出している。また、その斜面から頭大の礫が多数確認されている。2次調査では曲輪1と曲輪2では遺構の確認がなく、主郭に近い曲輪10で柱穴等が検出され、14C～16C末の青磁、白磁、染付碗・皿（福建省系）も出土している。3次調査は、堀切の状態確認を目的に行ったが、中央部のトレンチでは2m以上の掘削でも床面は確認されなかった。4次調査では上坑？（通路状遺構か）から階段状遺構が確認されている。5次調査では、柱穴等が多数確認されている。6次調査では、曲輪10南側の虎口床面で硬化面と瀬戸鉢（15世紀後半）が確認された。また、曲輪17は盛土造成により平坦部を作出していることが確認された。

表1 移佐城跡調査結果

調査期日	調査	場所	トレンチ名称	遺構等	遺物	遺物時期	備考
H3年1月	1次	曲輪21	1Tr	Pit	土師皿、輸入陶磁器外	14～16C末	
H4年2月	2次	曲輪1 2 10	8～10Tr 7Tr 2～5Tr	無 無 Pit、溝	土師皿、輸入陶磁器外	14～16C末	
H5年1月	3次	堀切I	11～13Tr	無	土師皿、輸入陶磁器外		
H6年1月	4次	曲輪28 A地区	14～18Tr	Pit、土坑? 階段状遺構	土師皿外		
H6年4月	5次	曲輪5	19～21Tr	Pit、溝	土師皿、輸入陶磁器外	15～16C	
H10年3月	6次	10虎口 17虎口	24～25Tr 22～23Tr	Pit、硬化面	土師皿、輸入陶磁器外 土師皿、輸入陶磁器外	15C	

第3図 穂佐城跡地形図



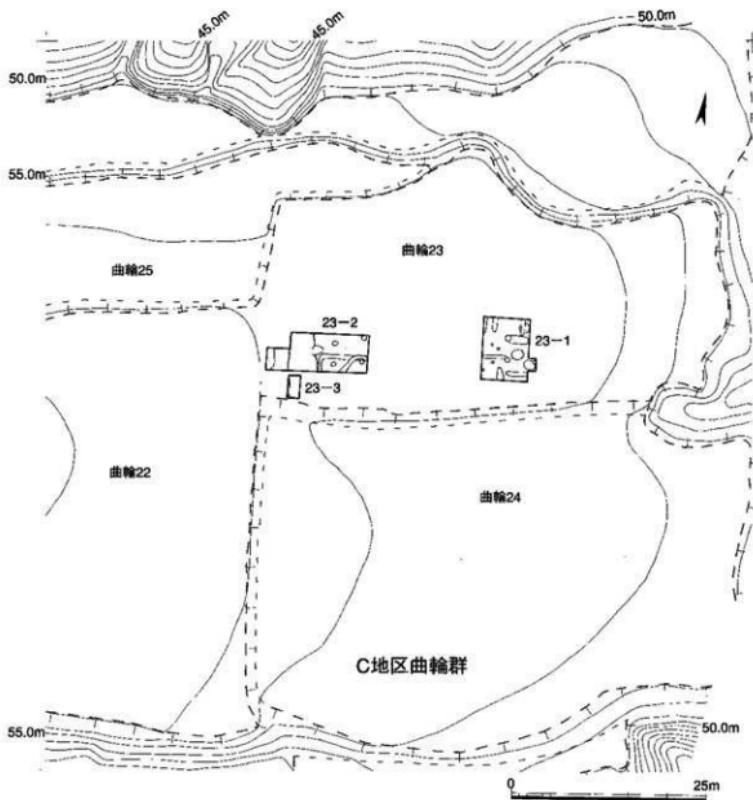
II 調査

第1節 曲輪23の調査

1 調査の場所と目的

今回の調査地は、大字小山田1027番地と1028番地にあたり、曲輪群C地区の中で標高の一番高い曲輪である。この曲輪は曲輪22と鍵状に繋がっており、曲輪の南側に調査区を設定した。その東側の調査区を23-1、西側を23-2、調査区23-2の南隣を23-3とした。調査面積は23-1が約50m²、23-2が約57m²、23-3が約5 m²の計112m²である。

今回の調査は通算で7次調査にあたる。過去の調査では城域東側半分のみで調査が実施されているが、その結果だけでは城館全体を概観するには無理があった。特に城館全体の大まかな時期的変遷を考える資料は城域西側（C地区とD地区）においては全く無い状態である。その基本的な資料の不備は、今後の保存整備計画や調査においても悪影響を与えることが懸念された。そのため、城域西側を中心としてその曲輪群の性格と時期を把握するための発掘調査が必要となり、今年度から来年度にかけて実施することとなった。



第4図 曲輪23（7次調査）調査位置図

2 調査経過

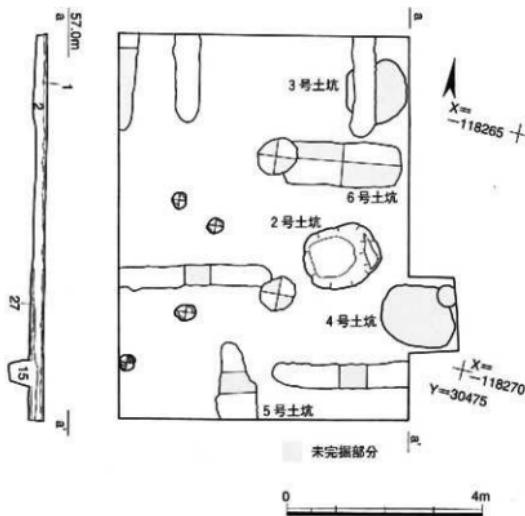
遺跡の現状変更許可を受けて、1月28日に発掘調査用具を搬入して環境整備を行う。並行して調査地に竹や雑木の切り株等が露呈していたため、安全対策も含めて除去作業を行う。

30日に調査区23-1と23-2をそれぞれ2m×5mで設定し、埋土を詳細に確認しながら掘削する。表土剥ぎは竹の根が蔓延していることを想定し、人力で行った。各調査区の2層と15層からは比較的新しい遺物が出土し、その下に地山が検出される。その面で遺構検出を行い、歯状の痕跡と共にそれと色調が似た溝やピットを検出する。そのため、それらの時期を判断すべく、さらに2層途中から擾乱坑が確認されていたことも考慮し、調査範囲を23-1が6m×8m、23-2を10m×5mに拡大し、そのすべてで地山までネジリ録等による掘削とした。2月16日に23-2の西側で溝状遺構（通路状遺構）の東側部分を検出する。24日に23-1の遺構検出を行い、2号土坑を掘削する。27日には通路状遺構の床面から硬化面を検出する。3月2日に通路状遺構の西側の立ち上がりを確認するため調査区を西側に拡大する。3日に2号土坑土層図実測。4日に通路状遺構と曲輪23の下段にある曲輪との関係を確認するために、調査区23-2の南側に調査区23-3を設定した。15日と16日で空撮と全景写真撮影を行う。23-3で通路状遺構の一部を検出。

18日23-3の土層図を実測し調査を終了する。基準点測量と水準測量は3月に入り実施し、それまでの実測データはその成果を基に後日修正した。また、2月18日に千田嘉博氏、3月9日に本中眞氏から現地で調査指導等を受けた。

3 基本層序

今回の調査地の地山は、AT（姶良Tn火山灰層）もしくはその上位層である。本来この層は、周辺遺跡



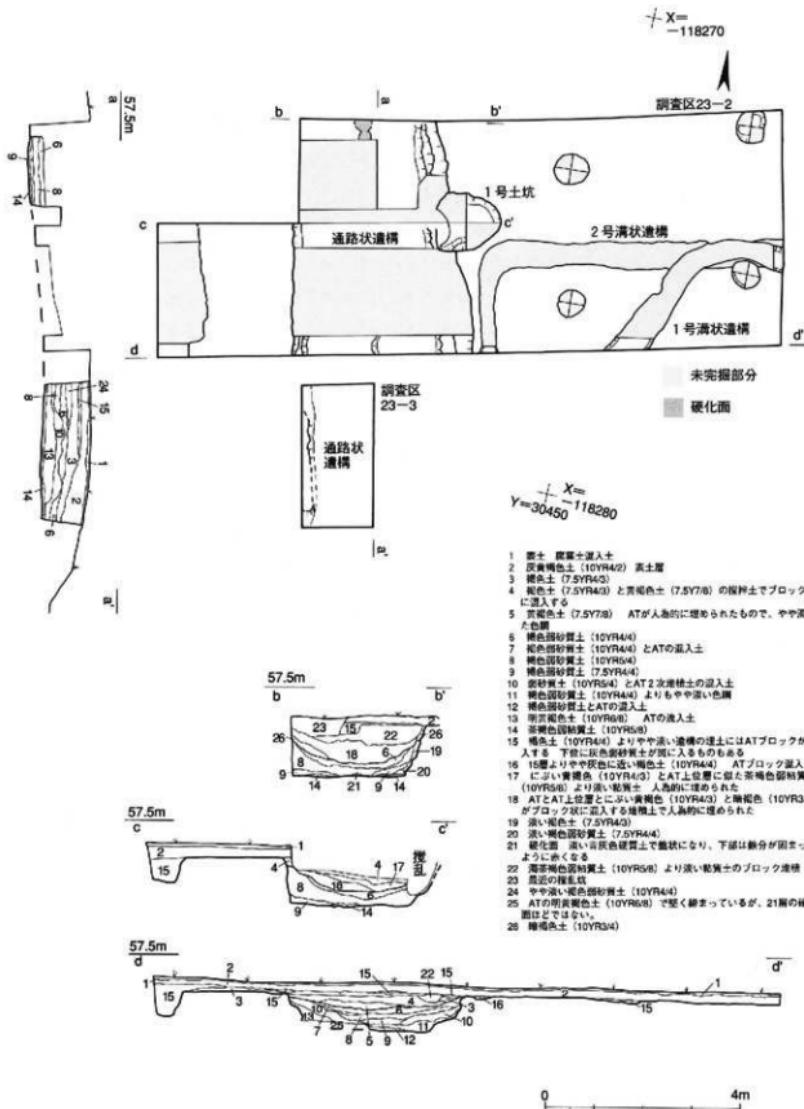
- 1 表土 麻葉土混入土
- 2 灰青褐色土 (10YR4/2) 表土層
- 15 棕褐色土 (10YR4/4) よりやや淡い
- 27 茶褐色膠粘土 (10YR5/8) の風化層

第5図 曲輪23-1 調査区全体図

の調査例からみると、表土から2m以上で確認されている。表土から地山までは4つの層が堆積する。2層は近代以降の耕作による擾乱土と思われる所以、表土層として取り扱う。その下位に褐色土 (10YR4/4) よりやや淡い色調の15層とさらにその下位の3層の褐色土 (7.5YR4/3) が部分的に堆積する。地山面に見られる歯状の痕跡は15層と同じ色調でありやや粘質である。この痕跡との切り合ひ関係で新旧関係は確認できるが、この痕跡の時期が明確でない。

4 調査の概要

土坑、溝状遺構、ピット、通路状遺構が検出されたが、時期的に近代以降のものが多く城館存続期間のものは少ない。また、遺物もほとんど出土せず、時期の特定が困難である。



第6図 曲輪23-2・3 調査区全体図および通路状造構土層図

土坑

土坑は6箇所で確認された。1号土坑は調査区23-2で検出された。楕円形プランで、溝ったAT上位層がブロック状に堆積している。土器片が出土しているが、この土坑には伴わないものと思われる。切り合ひ関係から通路状遺構よりは新しい。調査区23-1で検出された2号土坑～4号土坑は検出埋土やプランが似ていることから同じ性格の遺構と判断し、2号土坑のみ完掘した。2号土坑は長軸約1.5m、短軸約1.25mの方形に近い形状で、床面も長軸約0.9m、短軸約0.8mの方形状のプランである。東側に小さなテラスをもつ。残深約1.1mをはかり、壁面は垂直気味に立上がる。形状からみれば上塙墓や近世の座棺埋葬が推定される。上層観察からは座棺埋葬であるとの結論は得にくいが（解釈にもよる）、調査区横に近世墓碑が在りその可能性は高い。ただ、副葬品は無く、知覧城検出遺構との比較や他の用途も含めて検討中である。また、埋土上壤は分析中である。

5号土坑は小林降下軽石が埋土に含まれており、縄文期のものであろうと思われる6号土坑は時期不明であるが、新しいのではなかろうか。

通路状遺構

調査区23-2で検出された。南北方向に延びるように溝状に掘られた通路で、幅3.3～3.7mを計る。壁面はほぼ垂直に立上がる。西壁面の南側と東壁面の一部で浅いテラス状の段を有す。床面はほぼ平坦であるが、北側ほど低くなり高低差0.3m程となる。南側の床面は同じレベルを保ったまま曲輪24へ延びる。

北側の床面中央では硬化面を検出した。この硬化面は、床面地山直上に浅く堆積する茶褐色弱粘質土の上（一部被る）で検出された。その上層から6層までが自然堆積と考えられる。その自然堆積面は、この遺構の床面と同様に北側で低くて南側で高く、23-3では同じレベルで南側に延びる。6層直上で硬化面の破片が数点確認されたが、元位置を保っていたものではなく、6層上面で通路として使用されたものか、周辺からの混入かどうかはわからない。6層より上の5層、17層、18層等は人為的に短期間に埋められたもので、それによって通路としての機能は失われたと思われる。

また、通路状遺構の東西両側において、櫛列等の痕跡は明確には見られなかった。

遺物は自然堆積土の10層と人為的堆積土の18層下部で備前焼の瓦片が出土しただけで、直接遺構に伴うものは出土していない。

床面で硬化面が検出されたことで、この遺構が通路として使われていたのは間違いないだろう。ただ、通路遺構北側の調査を行っていないため、曲輪24から曲輪23に入る虎口なのか、それとも双方の曲輪を分断する堀なのかはわからない。そのため、この遺構を便宜上「通路状遺構」として呼称し、北側調査の進展を待って再度検討する。

溝状遺構

調査区23-1で4条、調査区23-2で2条検出された。23-1のものは何れも2層前後からの堀込みであり新しいものと思われる。23-2のものは試状の痕跡より古いが1号溝状遺構としたものは曲輪の区画性から見ると軸が異なっており新しいものと思われる。2号溝状遺構は切り合ひ関係から1号よりも古く曲輪の方向性とも合っているが、残存状況が悪く時期は不明である。

5まとめ

今回の調査の目的は、C地区における（曲輪23）の時期を明らかにすることにあった。その曲輪の時期について考えてみたい。

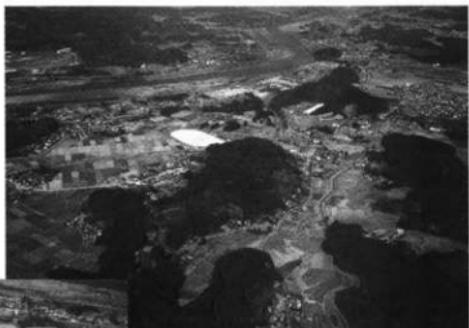
まず遺構から見たときに、とりわけ通路状遺構で見たときに大きく2時期に分けることができる。それは通路状遺構が使用された時期とその遺構が放棄され人為的に埋められた時期である。人為的に埋められた時期は出土遺物から16世紀以降という漠然とした時期しかつかめない。その間に自然堆積面を通路として使用した時期が存在した可能性もあるが、今のところはっきりしない。そして、それらの時期にピットや墓塚と思われる遺構等がどう係わっているのか。それを解くものは今のところ何もない状況である。

また、この曲輪の地山面は、AT（始良Tn火山灰層）もしくはその上位層である。それは、この曲輪が2m以上も削平されていることを意味する。近年に小規模な造成が行われたと推測できる箇所はあるが、大がかりな造成は無いと言ってよい。仮に2号土坑が近世のものとすれば、その遺構の深さから推定して、その時期はすでに現レベル近くまで削平されていたと思われ、この削平は城館存続時の造成と考えられる。しかし、現地山面での城館存続期の遺構が明確に確認できないため、造成時期の特定は難しい。

遺物からみると、通路状遺構の埋土下部層から備前焼甕が出土しているが、この遺構の時期を決定しうる出土状況ではない。また、土師器皿片がその他の遺構の埋土に混じって出土するが、これもそれらの遺構に伴うものではない。

このように、遺構に伴う出土遺物がほとんど無い状況では、この曲輪の時期を特定することは困難で、調査の目的を達することは出来なかった。ただ、遺構に伴った遺物ではないが青磁碗皿類などの出土からみると、14世紀代も含めた可能性を残していると言えよう。

図版 1

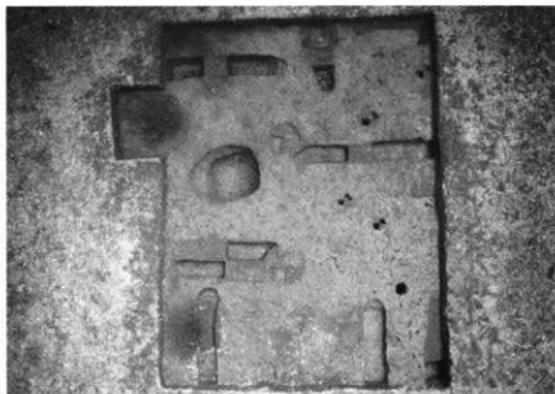


穆佐城跡全景（南から）

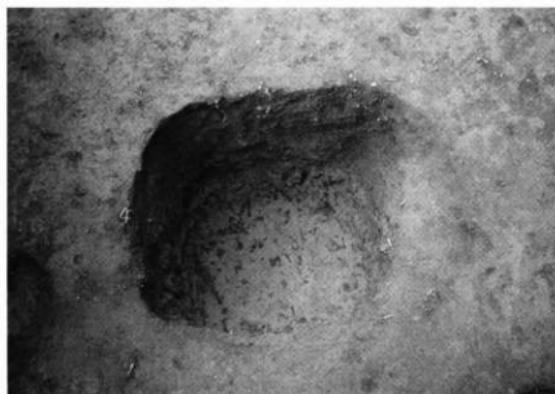
図版 2



調査区全景（空撮）



調査区23-1（空撮）



2号土坑（南から）

通路状遺構（北から）



通路状遺構北側（南西から）



曲輪23と曲輪24（西から）



表2 報告書登録抄

フリガナ	ムカサジョウアト
書名	穆佐城跡
副書名	穆佐城跡保存整備に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書(Ⅰ)
シリーズ名	高岡町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第33集
編集者名	島田正浩
発行機関	高岡町教育委員会
所在地	富山県東諸県郡高岡町大字内山2887番地
発行年月日	2004年3月31日

収藏遺跡名	所在地	コード		緯度	経度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
穆佐城跡	高岡町大字小山田 1027, 1028番地	45-381	311	31°55'46"	131°19'36"	H16.1.28 ~ H16.3	112m ²	保存整備
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
城館	中世	土坑 通路状遺構		国産陶器甕(備前)				

高岡町埋蔵文化財調査報告書第33集 穆佐城跡 2004年3月	
編集・発行 高岡町教育委員会 〒880-2292 宮崎県東諸県郡高岡町大字内山2887 TEL. 0985-82-1111 印 刷 株式会社宮崎南印刷 〒880-0911 宮崎県宮崎市大字田吉350-1 TEL. 0985-51-2745	